

華やカ哉
秋ガ一瞬
下巻
御杜守



典特版定限



華ヤカ哉、我ガ一族

下巻

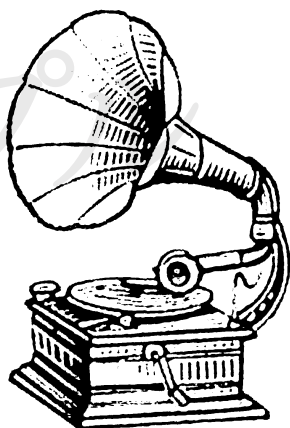
御杜 守



目次

第五章	初舞台	05
第六章	辰野宗太郎	09
第七章	宮村商店	14
第八章	見知らぬ兄弟	24
後記		33

上巻は「華やか哉我が一族モダンノスタルジィ for Nintendo Switch」
限定版に同梱されています。



第五章 初舞台

鍛冶師の家を出て下山すると、途中里が一望出来る場所があった。伍日前は新たな刀を打って貰うことへの期待だけで、里の家々まで見る余裕はなかった我輩は、足を止めて里全体の様子を窺うことにした。

あの男が何処で待っているのか思案する。これから話そうとしている相手には、最大の警戒心を持って挑まねばならないと考えた。普通の仕事を紹介してくれる輩ならそれ程の警戒心は必要ない。もし善人を装い我輩を罠に掛けるつもりなら敢えて掛かってもらおう。詐欺や窃盗といった類いの連中は底が知れるし我輩の相手にはならない。それ程我輩は自分の腕に自信を持っていた。

しかし今から捜し出す相手に我輩の自信は通用しない。相当に場数を踏んできたと分かる、物音しない無駄のない動き……我輩の目前に刀の切っ先を運ぶまでの刹那に、僅かな殺気を織り交ぜていた。しかもあの鍛冶師が打った刀を携えている。我輩如きが敵う相手ではないことは容易に想像が付く。腰に付けた刀の柄をぐっと握りしめ、里を注意深く探る。

「早かったな」

背後で葉の擦れる音と共に声がした。慌てて振り向くと『あの男』が立っていた。いつからそこにいたのか不明であるが、全く気配を感じ取れなかった。

京の道場でも似たようなことがあった。我輩の頭には無天流の文字が浮かび上がる。

「伍日で仕上げて貰いました」

「そうか。お前ならオヤジに打って貰えると思っていた。俺と同じ臭いがしたからな」

警戒心を解いて、男の話を聞きに来たことを態度で表すことにした。柄から手を離し改めて男の方をむき直すと、男も同じように刀の柄から手を離れた。

「いいだろう、場所を変えよう。付いてこい」

返答せずとも態度から我輩の意志が伝わった。

この男の仕事は人を殺めることだ。生きていれば母は悲しむだろうが、我輩がこれまで生きて来た目的を達成させる為には、通らねばならない路だと思っていたので迷いはない。

目の前を歩く男が何者か興味がなかった。興味があつたのは、この男が通信大臣を殺害した無天流免許皆伝者、辰野宗太郎かどうか。それだけだ。



案内された家は里の外れにあった。誰も住んでいない空き家を男が借りて住んでいるらしい。家の中に入ると明かりと呼べるも

のは無く、我輩の小屋に似た雰囲気を感じた。

男は雨に濡れた上着を入口に掛けると、囲炉裏に火を入れる。我輩が鍛冶師の小屋を出た時は既に雨が上がっていたので、男はそれより前からあの辺りで待機していたのだろう。

「ここは、あの鍛冶師の所に行く為に買った家だな。今回は参日で済んだが、杓週間以上かかる時もある。あんな何もない所で待つのは退屈だからな」

「何度か利用をされたのですか？」

「ああ。オヤジの刀は、切れ味はいいが折れやすいのが難点だな。しかも手入れはあのオヤジしか出来ない。手間が掛かる刀さ」

男が囲炉裏の炭を突くと小さな火の粉が舞った。

鍛冶師の家と同じように、囲炉裏を挟んで男と向かい合う。互いに視線を合わせず、ぱちぱちと音を立てて燃える炭を見つめながら会話を続けた。

「……先程あなたと同じ臭いがあると謂いましたが、鍛冶師の所では血の臭いがしないとも謂いましたね」

「謂ったな。あのオヤジの所に来る奴は、復讐か己の正義の為か……いずれにしても陽の当たる路を外れた奴しか来ない」

それにしても我輩は、通信大臣を殺害した男が目前の男だと思っただけで、我輩が無天流を詳しく語れる程でもないのに。

「金はあるのか？」

「実は帰りの汽車賃すらない状態でして……日数は掛かりますが、歩いて帰るつもりでおりました」

「随分とオヤジに取られたようだな。それだけ見込みがあると思われたのだろう」

「では見込みのない人ほど安い値を付けられるのですか？」

「そうらしい。普通は逆なんだがな。それに鍛冶師のオヤジの基準だ、何を基準にしているのか知らないが」

知らない、と謂いながら実は知っているのだろう。目の前の男は我輩の倍、いや三倍も四倍も高い値を付けられたに違い無い。

男は我輩に焼き上がった餅と茶を差し出した。

「そいつを食べたら移動するぞ」

打ったばかりの刀の斬れ味を試す時が来たのだ。



家を出た後は無言で男に付いていった。汽車を乗り継ぎ帝都まで出る。行き先を知った時は一瞬躊躇したが、見えない相手をいつまでも恐れているわけにもいかない。そうして我輩は再び帝都の土を踏むことになった。

「ところでお前のことを何と呼べばいい？」

「崎田です」

「分かった。俺のことは真壁でいい。失敗したら自分で帳尻を合わせろ。その刀なら結果は出せるだろうが、人を斬るだけじゃ話にならない」

以前見た新聞の記事を思い出した。通信大臣から受け取った名刺が手を離れ、地面に落ちる頃には姿はなかった——と。誰もいない場所で相手が出来ればよいが、周りに人がいる場所では、騒ぎになる前に素早くその場を離れる必要がある。

「分かっています」

「だったらいい。お前が捕まって俺のことを話した所で一向に構わないが、面倒なのでその時は始末する」

返り討ちにしてくれる、と心の中では息巻くが、目の前の相手の技量が分からぬ我輩ではない。今はこの男から盗める技は全て盗むつもりでいたので、成功し男の信頼を得ることを第一とした。

帝都に到着すると男は街鉄に乗り換え、長屋やアパートが立ち並ぶ川沿いの街近くの橋に立ち、辺りを見回す。近くに屋台を見付けたのでそこに立ち寄ることにした。屋台の店主と我らの偽りの会話を繰り広げ時間を潰す。

真壁は時を待っているのだろうと察した。我輩の相手が一人なのか数人なのかは分からない。帰ってくる時を待っているのかそ

れ以外かも分からない。我輩はただ真壁の動きに合わせて待った。

日が沈み夜の帳が降りる。屋台の提灯が赤々と光り出した。酒を飲み干した真壁は空になったコップを勢いよく置いて立ち上がる。店主から見ても我輩から見ても酔っているように見えた。

千鳥足で屋台を出る真壁の横に立つと酒の臭いが立ちこめる。これから我輩の初舞台だというのに大丈夫だろうか顔を窺ったが直後、考えを改める。赤ら顔はいつの間にか普段の顔付きに戻り、左手にはしっかりと獲物が握られていたのだ。

「そろそろ頃合いだ。行くぞ」

「……分かりました」

人に嘘を吐き偽の情報を与えることなら我輩も行っていたが、その我輩も騙されるとは。酔った振りなどではなく本当に酔っていると思っていた。

我輩はいつの間にかこの男に興味を持つようになっていた。真壁が辰野宗太郎として、何故通信大臣を殺す必要があったのか。記事には犯人の名は記載されていないが、何故無天流だと分かったのか？ そんなことを考えながら付いていく。

「……ここだ」

見上げると、我輩が以前住んでいたアパートに似た建物があった。

「この建物の二階奥だ。中に男がいる。そいつを始末してこい。お前の姿を他の奴に見られたらそいつも始末しろ。現場を見た奴も同じだ。人知れずさっさと片付ければ事は大きくならない」

相手の男の情報や家の中の様子などの情報は一切ないが聞く必要もなかった。我輩は分かったとだけ答えると、腰に付けた刀を力強く握る。いよいよ我輩の舞台の幕が上がるのだ。

「男について聞かないのか？」

「知った所で結果は変わらないと思います。何も腕に自信があるからそう謂っているわけではありません。俺の腕の程はどうであれ、何としてでも結果を出すからです。事が大きくなったとしても」

「心意気だけは買ってやろう。だが現実はその甘くはない。初仕事なら特にな。先程の橋で待つ」

てつきり仕事の後を確認するかと思っただ、どうやら違うようだ。我輩は男が去るのを見届けると闇に解けるかのように気配を消した。

さて、と建物を見上げる。戸を開け中に入ってもよいが鍵が掛かっていると面倒だ。屋根伝いに移動して窓から入ることも考えたが、屋根を歩けば下の部屋に響く。アパアトの横に電柱と明かりの点いていない建物があった。それらを使って二階の部屋に近付き、窓から入れば問題なさそうだ。

我輩は周りに人気がないことを確認すると、建物と電柱を使って二階まで登り、窓から部屋の中を窺った。

(あの男は……！)

部屋の中にいたのは時合だった。



続きは

『華やか哉、我ガ一族 幻燈スタルジィ for Nintendo Switch』
限定版小説小冊子にてお楽しみください。

